

そして詩の原稿を新聞紙に包んで『之は辻潤が來たら渡して下さい』と言つた。

僕の場合は自分の生命の長くない豫感に顫えて、色んな準備に忙しかつたとも言へる。

『誰か來て居られるんですか』と聞くと、『改造社の小僧さんが、本の奥印を捺しに來て居られるのだ』と言つた。

すると十七八の洋服を着た美少年が、火鉢の前に坐つてゐた。

啄木の歌集を持つて居た。

僕は其の歌集を擴げて、大きな聲で歌ひ出した、すると段々昂奮して來たのだ。

三四十ばかりも讀むと、聲が變てこになつた。

通りすがりの人が立ち止つて、聞耳を立てた位だ。

其の少年は鹿兒島生れだと言つた。

西郷隆盛と同じだ。

僕は春子を掠奪しなければならぬ。

停車場まで見送らす事を口實にして、無理矢理汽車に押し込んで、そして大阪か、房洲の黒瀬